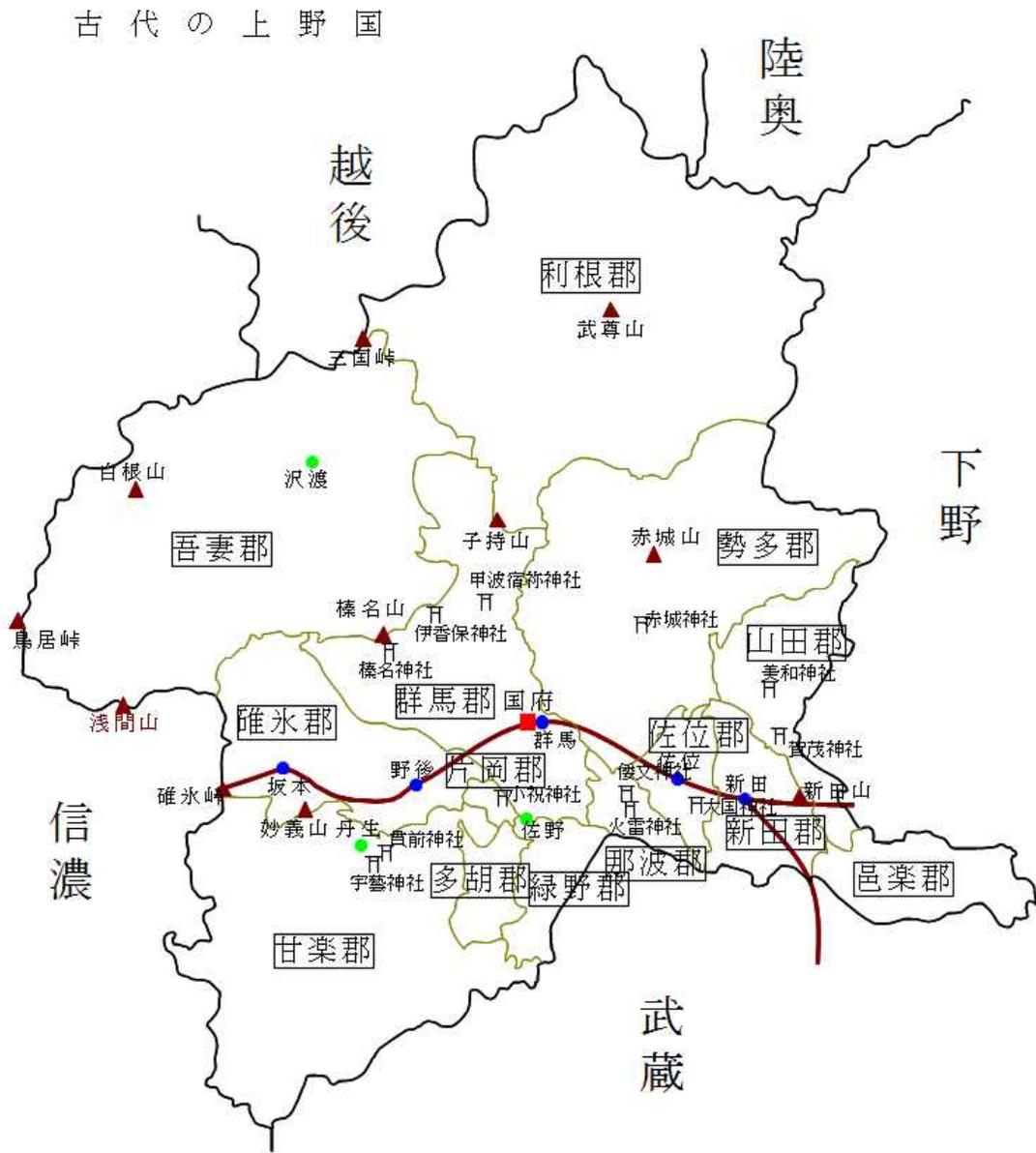


「東歌によまれた上毛三山」

群馬県立女子大学 北川 和 秀



※郡界は寛文八年（1668）の上野国郷帳の村名に基づき推定した。

◎上野国東歌（巻一四）

（△は山が登場する歌。うち、▲は上毛三山）

1. 相聞歌

- △①日の暮に**碓氷**の山を越ゆる日は夫なの袖もさやに振らしつ（三四〇二）
- ②吾が恋は現在もかなし草枕**多胡**の入野の将来もかなしも（三四〇三）
- ③**上毛野**安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ（三四〇四）
- ④**上毛野**平度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（三四〇五）
- ⑤**上毛野**小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに（三四〇五或本歌）

- ⑥ **上毛野** 佐野の莖立ち折りはやし吾は待たむ多今年来ずとも (三四〇六)
- ⑦ **上毛野** 真桑島門に朝日さしまぎらはしもなありつつ見れば (三四〇七)
- △⑧ **新田山嶺** には着かなな吾によそり間なる子らしあやに愛しも (三四〇八)
- ▲⑨ 伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいざ寝しめとら (三四〇九)
- ▲⑩ 伊香保ろの岨の榛原ねもころに将来をなかねそ現在し善かば (三四一〇)
- △⑪ **多胡** の嶺に寄綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに (三四一一)
- ▲⑫ **上毛野** 久路保の嶺ろの葛葉がた愛しけ子らにいや離り来も (三四一二)
- ▲⑬ 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす逢へる君かも (三四一三)
- ▲⑭ 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝てば (三四一四)
- ▲⑮ **上毛野** 伊香保の沼に植ゑ小水葱かく恋ひむとや種求めけむ (三四一五)
- ▲⑯ **上毛野** 可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね (三四一六)
- ▲⑰ **上毛野** 伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ勝れ (三四一七)
- ▲⑱ **上毛野** 佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも (三四一八)
- ▲⑲ 伊香保せよ奈可中次下思ひどろ隈こそしつと忘れせなふも (三四一九)
- ▲⑳ **上毛野** 佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ (三四二〇)
- ▲㉑ 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ (三四二一)
- ▲㉒ 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり (三四二二)
- ▲㉓ **上毛野** 伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり (三四二三)

## 2. 譬喩歌

- △① **上毛野** 阿蘇山 葛野を広み延ひにしものをあぜか絶えせむ (三四二四)
- ▲② 伊香保ろの岨の榛原吾が衣に着きよらしもよひたへと思へば (三四三五)
- △③ しらとほふ小 **新田山** の守る山の末枯れせなな常葉にもがも (三四三六)

## 3. 国名不明歌のうち、上野国の歌の可能性あるもの

- △① 佐野山に打つや斧音の遠かども寝もとか子ろが面に見えつる (三四七三)
- △② 子持山若鷄冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ (三四九四)
- △③ 伊波保ろの岨の若松限りとや君が来まさぬうらもとなくも (三四九五)
- ④ 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ (三五四〇)
- ⑤ 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは (三五六〇)

## ◎ 上野国防人歌 (巻二〇)

- ① 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも (四四〇四)
- ② 吾が妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ (四四〇五)
- ③ 吾が家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも (四四〇六)
- ▲④ ひな曇り碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも (四四〇七)

◎延喜式神名帳の上野国の条

上野国十二座	大三座 小九座
片岡郡一座	小
小祝神社	
甘楽郡二座	大一座 小一座
貫前神社	大神
	宇藝神社
群馬郡三座	大一座 小二座
伊加保神社	大神
	榛名神社
	甲波宿祢神社
勢多郡一座	大
赤城神社	大神
山田郡二座	小並
賀茂神社	美和神社
那波郡二座	小並
火雷神社	委文神社
佐位郡一座	小
大国神社	

◎「伊香保」の語源

- ・現在の「伊香保」は渋川市の町名。伊香保町。
- ・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。
- ・「いかほ」という語の構成は「いか(厳) + ほ(穂・秀)」と考えられる。
- ・「ほ(穂・秀)」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎(ほのほ)」は「火の穂」の意。ろうそくの炎の形は槍の穂とよく似ている。山の名には「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じと考えてよい。
- ・「いか(厳)」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」(『古典基礎語辞典』の「いかづち【雷】」の項)を表す語で、「いかし(厳し)」「いかめし(厳めし)」「いかる(怒る)」「いかづち(雷)」などの「いか」も同じ。
- ・「いかほ」の「いか(厳)」は、この山のもつどのような性格を「いか(厳)」ととらえたのであろうか。

- ・山の姿
- ・雷の巣窟
- ・火山

◎ 「久呂保」の語源

- ・「ほ」は、「いかほ」の「ほ」と同じと見てよい。
- ・「くろ」は？
- ・「くろく」という名の山がある。それらのどれかが「くろほ」の語源を考える上で参考になるかもしれない。↑黒髪山（佐賀県）、黒川山（長野県）、黒駒山（山梨県）、黒河山（滋賀県）、倶留尊山（三重県）、黒滝山（広島県）、黒姫山（新潟県・長野県）、黒森山（青森県）、黒檜岳（栃木県）、黒岩山（富山県）など
- ・「くろほ」は赤城山のこととされるが、さしたる根拠があるわけではない。赤城山の最高峰が「黒檜山」で、これが「くろほ」と似ているという程度の根拠。
- ・赤城山東麓に存在した黒保根村（南勢多郡、のち勢多郡に所属）は、明治二十二年に、宿廻・水沼・八木原・上田沢・下田沢・上神梅・下神梅・塩沢の八ヶ村が合併して成立したものである。村名は万葉集東歌にちなむ。
- ・赤城山北西麓に存在した久呂保村（北勢多郡、のち利根郡に所属）は、明治二十二年に、川額・森下・椽久保の三ヶ村が合併して成立したものである。村名は万葉集東歌にちなむ。